

『散文トリスタン物語』と Hudent および その子孫の介入

佐佐木茂美*

1996年7月初旬、スイスの構造主義言語学者 Ferdinand de Saussure のトリスタン物語関係の手書き原稿写しが学習院大学の三宅徳嘉氏（名誉教授）から稿者のもとに届いた。同大学所蔵のソシュール原稿のマイクロフィルムの一部をなしており、ソシュールの言語学関係はすでに出版済みであるが⁽¹⁾、そのトリスタン研究は未刊のままであり、かつその存在自体がトリスタンの専門家に知られてはいない。

ソシュールが「言語構造を解明するのに使った方法を、神話・伝説に適用しようとしたもので、素材分析のノートにすぎないとはいえ、suggestif な点がすくなくならずふくまれていると感じます」といった三宅氏による但し書きが付されていた。オリジナルはスイス・ジュネーヴ大学附属図書館所蔵の *Nibelungen* を扱った部分に相当し (Ms. Fr. 3958-3959)、学習院大学では同氏を中心に解説が始められていた⁽²⁾、とのこと、縁りのない者へ信頼をお寄せ下さったことに深甚の謝意がここに示されるものである。

氏はそれに先立って、*Romania*⁽³⁾ および *Tristania*⁽⁴⁾ のそれぞれフランス・アメリカの専門誌掲載の拙稿に関し過分の評価をお寄せ下さっていて、*Tristania* 誌掲載の論文とソシュール・ノートとの関連を見越した上での今回の恵送となるのではないかと考えられる。

稿者はトリスタン物語の二つの系譜（流布本系および宮廷本系）のうち前者（Béroul 本）残存断片4485行⁽⁵⁾——もともと最初のヴァージョンをフランス語とする断片の繋ぎ合わせしか存在しない——の二人の主要登場人物の別離に交された anel（イズーよりトリスタンへ）の機能検討と他言語の諸版をも含む照合比較から物語後半部の筋書を推定した。*Tristania* 誌上の論稿を発表するに及んで引き裂かれた主人公の間を取り持つこの介入もさることながら、物語の全体像の把握のために狩猟犬 Hudent、この動物の存在がなお気掛かりとなり始めていた、という経緯がある。

I. トリスタンとかれの獵犬

ソシュールの位置はどうなるのか？かれの専ら扱う Petit Creü と呼ばれる犬狗が現われるのは、フランス語版では宮廷本系の Thomas d'Angleterre の残存断片⁽⁶⁾（制作年代は1173年か？）⁽⁷⁾に依拠したとされる『オクスフォード狂恋』（*Folie d'Oxford*）（以下 FO）⁽⁸⁾——直後の制作年代か——のみである。したがって原本である Thomas にもこの犬狗がいた可能性がある。さらにドイツ語版宮廷本系の、——つまりトマに依拠する Gottfried von

160
(9)

* 言語文化学科 教授 中世フランス文学

Strassburg（制作年代十三世紀初め）ではマルク王により追放の身となったトリスタンは Petit Creü を残し、流布本系に現われる Hudent を連れだす⁽⁹⁾。ノルド語の『サガ』——宮廷本系で十三世紀初めに書かれる——には一頭で名はない、としても二頭のそれぞれの特徴をもっている⁽¹⁰⁾。『サガ』はもともと二頭の犬狗を一頭にしたのか、そうだとすると流布本系にむしろ近づく。

かつて Joséph Bédier はケルトの伝説（口承段階）から直接に材源をえたフランス語での最初の物語（Bédier はそれを archétype と呼んだがその呼称、さらに archétype そのものを今日では疑問視する見方がある）には取り込まれることなく、「後に考え出された挿話的小詩」⁽¹¹⁾（de petits poèmes épisodiques imaginés plus tard）に Petit Creü が介在していたとみていた。これはケルト起源説を極力抑えた⁽¹²⁾碩学にしての見解であって実証的な研究が以降なされたわけではない。

流布本系は本当に Hudent しか知らなかったのであろうか？宮廷本系は FO や Gottfried のように流布本系が採用しなかったデータ、Petit Creü をあとから組み入れていたのであるか？13世紀30年代に制作された、流布本系を大きく曳きずる『散文トリスタン物語』（*Le Roman de Tristan en prose*）はいままで全く研究対象とはなっていない。ソシユール・ノートはこの地点から出発している。

「『散文物語』ではプテイクリュはトリスタンの獵のポインター犬ともはや同一にすぎない。いやむしろプテイクリュに相当する物は何もない」（Ms 3959/10.1）

（Dans le *Prosa-Roman*, Petit-Criü ne fait plus qu'un avec le brache de chasse de Tristan. Ou plutôt rien qui correspond à Petitcriu:）

だがソシユール・ノートはこの最初の行のあと『散文トリスタン物語』から逸れてしまう。したがって本稿は『散文トリスタン物語』（以降『散文』）を検討し、「トリスタン物語」のコーパスのなかの二頭の犬狗を次に取り上げることとなろう。

おなじイヌ族と見られる「狼」⁽¹³⁾のいる「赤頭巾ちゃん」に魅了されようとも「物語性」に乏しい犬狗に対する人々の関心は低くまた文学作品の研究においても出遅れがある⁽¹⁴⁾。

ケルト文化は犬狗への思い入れ、——ユダヤ＝キリスト教の伝統での犬狗への蔑視があり⁽¹⁵⁾、ギリシャ＝ローマの古典文化は肯定的・否定的二面性を備えていた⁽¹⁶⁾——その積極面を強調することで際立つ。著名なケルトの英雄 Cuchulainn は「イヌ」（Cu-）を名の内にもち、彼の武力は犬狗に準えられる⁽¹⁷⁾。トリスタン伝説——ケルト起源（主人公の名はスコットランドとグレート・ブリテンに定住していたピクト人の王の名 Drostán、Tristan はウエールズ系、物語のプロトタイプはアイルランド）の定説をもつ——の主人公もまた犬狗との深い関わりで示されてここに不思議はない⁽¹⁸⁾。十二世紀から十三世紀に書かれた

159 (10) 作品群で主人公の所有となる犬狗二頭までもが固有名詞 Hudent, Petit Creü をもって名指されている、これも偶然ではないはずなのだ。

物語の祖型の大筋は「Diarmaid と Grainne の駆落 (aithid)」の説話⁽¹⁹⁾では——Finn の奥方 Grainne の一方的な前者 (Finn の臣下) に寄せる情念が主題となっている。奥方は Diarmaid をして森への駆け落ちを迫り魔術的な強制力をもつ geasa (禁忌)⁽²⁰⁾——geis の複数——をしかけて、両者は Finn の追手を逃れての逃亡生活に入る。追手の獵犬の上に両者の糧食の手段“狩り”のイヌが絡む。「Diarmaid の死」⁽²¹⁾ではトリスタンの前身ともいべき人物の最後が語られる。このケルトの勇者は Finn の催す狩りを拒みえない⁽²²⁾という geasa に置かれている。獵犬の吠え声、というヴァージョンもある、妻を失った怒りの王は獵犬の吠え声によって Diarmaid を誘き出そうと試みる。

トリスタンの前身は獵犬とあらがひ難い運命で結ばれ、実行——吠える獵犬の追跡——と続く死を迫まる geasa がかれに付きまとう。こうした原始社会の一種の禁忌を媒介として誕生した英雄の物語に当時のフランスの風習や他起源の説話⁽²³⁾が接触し、変容をきたしていった、と思われる。

多くのヴァージョンの中でも Néo-Tristan と言われる、時代の大家作家 Chrétien de Troyes の手になる、筋書の類似は指摘できるが登上人物の名を変えた *Cligès* (制作年代 1176か?) の中でなお次のように主人公を特徴づける。

かれ (クリジェス) はマルク王の甥トリスタン
より逸る劍術や弓術に心得あり
鷹狩や 狩獵 にはさらに優っていた (vv. 2749-2751)⁽²⁴⁾

Si sot plus d'escremie et d'arc
Que Tristanz li niés le roi Marc,
Et plus d'oisiac, et *plus de chiens*:

oisiac を「鷹 (原義は“鳥”) 狩り」、chiens (原義は“犬狗”) を「狩獵」と訳出している。「鳥」は「鷹狩り」を、「イヌ」は「狩獵」を——二種の狩りはともに獵犬を使うが後者では捕獲と收拾ともに獵犬が使われる——既にそれだけで指していた。

叙事詩の主人公が劍術はともかく、弓矢を操り、鷹狩や狩獵に長けていたという記述を欠くにたいし、それらの技により物語の主人公であるクリジェスの才能が強調されているのは興味深い。二種の狩りは⁽²⁵⁾猛禽や犬狗の飼育を含め当時の宮廷社会の騎士の教育に組み入れられ、その理想像を塑像する。

このテキストでトリスタンが宮廷社会の典型として機能していることが注目される。トリスタンに優る「鷹狩り」、「狩獵」の名手はいない、という前提を作者クレチャンは十分に利用している⁽²⁶⁾。このテキストで「鷹狩」との関連が強調されているが12世紀半ばからヨーロッパに伝わった⁽²⁷⁾とされる獵犬を使う「狩獵」が「トリスタン物語」で最も広範囲に採用される主人公の肖像である。「狩獵」がイギリスに渡ったのは「トリスタン物語」によるともみられているのだ⁽²⁷⁾。

狩獵書の類に関しての手解きの書は、十四世紀にもっとも多くの巻数が著わされる。非

現実を主題とした物語にあっても猛禽や猟犬の生態描写が極めて正確であるが狩猟方法は詳細を欠くという指摘がある⁽²⁸⁾。つぎの四例に止めよう。まず Marie de France の短詩 (lais) *Guigemar* 主人公の前を狩猟係が猟犬10頭を、あとには従者が弓、ナイフ、矢筒を持って森に向かう⁽²⁹⁾。第二例は猟犬係および弓手が獲物を追う脚の速い馬 (chaceor) に乗る王を補佐する⁽³⁰⁾。以上の二例はいわゆる「ブリテイン (ケルト系) の素材」であるが、第三例として古典古代の『エネイド』中世フランス語による翻案 *Enéas* (制作年代12世紀中頃) では犬一頭、弓、矢筒、10本の矢を数える⁽³¹⁾。第四例、しかしオリジナルには犬一頭の記述を欠く⁽³²⁾。

流布本系ではトリスタンの狩猟装束は第三例に最も近い。理想的宮廷人の「愉楽」⁽³³⁾としての「狩猟」は「ブリテインの素材」に読み取れ、予想されるように宮廷本系の方であるが二人ずつの補佐のある第一、第二例には入らないことが注目されよう。

度合の程度は異なるが、狩猟人トリスタンは両系列ともにさらに本源的なかれの定義であるように思われる。かれは「恋人」であるよりもまず「狩猟人」であり、その役割を二つながら果たしているかに見える。この存在規定は、「犬狗を伴う者」なのである。

II. 『散文トリスタン物語』

本稿では膨大な『散文トリスタン物語』 (*Le Roman de Tristan en prose*) の犬狗をまず検討するところから始めたい。欠損のあるなしを問わず写本82を数えて、13世紀以降、韻文で書かれた上記のテキスト群を凌いで、『トリスタン物語』といえはまず『散文トリスタン物語』 (以降『散文』) を指していた。Béroul (以降B) の系譜に属する本テキストには Petit Creü は不在、猟犬 Hudenc (表記ママ) がつぎの計四箇所に見られる。

[I] Ed. R. L. Curtis, tome II, Leiden, 1976, p.151, § 553;

[II] Ed. Ph. Ménard, tome I, Genève, 1987, pp.272-276. § 186-188;

[III] Ed. G. Roussineau, tome III, Genève, 1991, pp.167-168, § 125, 137-138;

[IV] Ed. J. Bédier, tome II, pp.394-395.

[I] 「大いなるモロワの森にて」 (en la grant forest dou Morroiz) (§ 552, I. 21-22)

Hudenc の具体的な描写は『散文』にはない。そこからすべての流布本系が出てくる B は「(いかなる) 王侯とてかかる (良い) 猟犬を持ちえず」 (Qens ne rois n'out tel berseret) (v.1441) として「ポインター犬」 (brachet)⁽³⁴⁾ (vv. 1440, 1457, 1501, 1539, 1609, 2696, 2728) …との明示が7回ある。

それまでの「動物誌」は伝統的肯定否定見解を繰り返した。それにたいし同系に組み入れられる、ダンテの師 Brunetto Latini は1263年から1264年にかけてフランス語で百科全書『宝物の書』 (*Le Livre dou Tresor*) を著わし「ポインター犬」に関し「耳が垂れ」、「動物や野鳥の匂い」を嗅ぎ分ける習性ゆえに狩猟に適し、主人にたいし「情愛が深い」⁽³⁵⁾としている点は注目される。

ダン」(Hudent li bauz) (v.1610) とあるのみ。だがその行動にはきわめて詳しい。みずから介入して200行にわたって、主人に置き去りにされて悲しむ Hudent を詳述する (vv. 1437-1636)。

マルクに囚われの身を「トリスタンの跳躍」(v.954) と命名された奇蹟的な跳躍で追手を逃れモロワの森 (v.1275) に主人公は分け入るが、それを追う Hudent の方は同じ岩の上にそそり立つ礼拝堂の窓から飛び降りた時、片足に傷を負う (vv.1514-1516)。

主人公とその愛犬に同じ行動をさせて、トリスタンの「定め」の特別な意味を、それに従う動物にも優る超自然の能力を明示する。しゃにむに後を追ひ、「トリスタンの跳躍」を仕損じる獵犬の運命は主人公に従属しつつ重なる。森にこだまする Hudent の声はトリスタン等を恐怖に落し入れる (v.1535)。イズーは狩獵の人トリスタンに次のように言う。「獸を狩るのに吠えるは犬の性、習い」(vv.1574-1575)⁽³⁶⁾ (Li chiens sa beste prent au cri, Que par nature, que par us.) と、殺害を企てるかれを嗜める。そこで獵犬の本能を矯め「吠えることなく」(sanz crïer) (v.1622) 獲物を追うように調教されて、逃亡者トリスタンとイズーそしてゴヴェルナル(幼年時代の主人公の養育係りであり後年は従者)の森の生活を支える。一方、ドイツ語による流布本系の Eilhart von Oberg は Utant——あきらかに Hudent と同列——という名の獵犬を導入し (vv.4369-4490)⁽³⁷⁾、トリスタンは最初にポインター犬を使って狩獵を行ったとしている (vv.4542-4545)⁽³⁸⁾。

ここでの「森」はもちろん現代語のそれではない。silva と対立する forestis⁽³⁹⁾、狩獵空間、貴族階級の「愉樂」の特権的場である。だが皮肉なことに流布本系は勿論のこと、宮廷本系も時代の反映のない、primitif な生活を主人公に課している。「トリスタンの跳躍」という慌ただしい逃亡の故に、かれは弓矢を持ち出してはいない。ゴヴェルナルが森番から奪った盗品 (vv.1281-1284) が当初は使用され、主人公が「たいそう優れし射手」(v. 1279)⁽⁴⁰⁾でみずから森に獲物を追ひ「弓を取り、森を馳せ、…矢筈を弦にかけ射る」(vv.1285-1286)⁽⁴¹⁾。そこへ Hudent の出現によりその原始的／民衆的手法は変わる。さらに先でトリスタンが「撃ち損じのない弓」を「発見」(v.1752)⁽⁴²⁾するにおよび fuga 空間は神話的、本源的人物の潜む場と変容する。

『散文』も恋人たちの空間を「モロワの森」に置き、とくに Hudent の名はもちろん幾つかの詳細も B を下敷きとしている。だがここでの生活を決意するにいたる彼等の言葉は、B の具象的な逃亡空間ではもはやない。「(ここに分け入れば) われらは世界を失おうし、世界はわれらを」(\$ 550, l. 35)⁽⁴³⁾「情熱恋愛の神話」の宣言が「モロワの森」でおこなわれる。B の三名の生活はイズーの侍女 Lamide が加わる (\$ 552, l. 22)。作者介入でこの「森」が獲物が最も多い (\$ 550, l. 19-20) とあって、主人公の狩りの腕が歌われることもない。トリスタンの狩獵は逃亡者の生活の基盤ではなくなっている。「よき新鮮な泉あり、日毎に獸肉があろう」(\$ 552, l. 17-18)。さらにゴヴェルナルは近隣の城に出向き、他の食料調達を行っている (l. 19-20)。

一テンポ遅れの主人を慕う Hudent の狂おしい追跡劇の部分はここにはない。トリスタンがマルクにおのれの馬 Passebruel と「おのれのポインター犬、ユダン」(Hudent, mon

brachet) (§ 553, l. 3) の返還を所望して、ゴヴェルナルを王の許に送る。怖れから王は使者に「快く」(volentiers) (l. 19) 馬と猟犬を渡す。トリスタンの馬が最初に置かれ、ユダンと一緒に戻されている。『散文』では主人公の猟犬との関わりはその分薄らいでいる。Bでは馬は狩猟場面で現われないし、まして固有名詞を保持してはいない。

取り戻した時点でトリスタンの狩猟が始まる (l. 26)。トリスタンは自分を捕えようとのマルクの「奸計」を恐れ、「彼のポインター犬、ユダン」を調教する「吠えずに獲物を追おう」(chacier la beste sanz glatir) (l. 37) とあって明らかにBの筋書が尊重されている。としても付加されているものはない。

王はトリスタン一行がモロワにいることを感ずいていた (l. 38)。トリスタンとゴヴェルナルが狩りにでている留守に、マルクは王者の狩りをすべく森に入り (§ 554, l. 1-2)、イズーと侍女を連れ去る (§ 555, l. 9-10)。

〔II〕「大いなるモロワの森にて」(en la forest du Morois) (XV. § 183)

第二挿話は再びモロワの森——狩猟空間——のなかに位置する。マルクは一匹の鹿を追い (l. 5)、とある泉水に至る。野人／狂人の姿のトリスタンはその泉水の傍らで眠り込み (§ 186, l. 4-5)、角笛に跳び起きる。「さあ早く、ユダンよ！それを捕えよ！それを捕えよ！」(Or tost, Hudenc! Pren le moi! Pren le moi!) (l. 8-9)⁽⁴⁴⁾と叫ぶ。紛れもない猟犬に獲物を追う命を与える声。一方、王はユダンの名を耳にして自分の甥を思い起こす (l. 10-11)そして、じっと目の前の変り果てたトリスタンを凝視し始める。だがかれは甥を認めることはできない。本人は (l. 12-13) 狂人の印として顔を炭と灰でぬらされていたから。

マルクは狂人／道化を居城のある Tyntajol に連れていく (§ 188, l. 5) 宮廷でも誰一人としてトリスタンと気付く者はいない。

「かれ (トリスタン) のポインター犬を除いて、(ポインター犬は) かれを見るや直ちにかれと認める。人の彼と認めえぬところをポインター犬は彼と認めた。コルヌアーユの人々は皆この話をたいそう大いなる驚異ととった。かれらはユダンによりかれを認めた、かれらの「感」ではいささかもない。」⁽⁴⁵⁾

(... Se ne fust Hudenc son braquet, ki le *reconnut* tout maintenant que il le vit. La u li home ne le pooient *reconnoistre*, le *reconnut* li braqués. Et ceste cose tinrent a mout grant merveille tout cil de Cornuaille. Il le *reconnurent* par Hudent, et non mie par lour sens.)

この〔II〕「大いなるモロワの森にて」に「認める」、「認めた」がわずか4行に4度反復されている、人間の認識は動物のそれに依存しそれを通してなのである。獲物を追跡するよう命ずるトリスタンの覚めやらぬ声の発する Hudenc の名に注意を留めつつも、マルクはトリスタンと「認め」得ない。この行との明らかな対比もある。ここはBにおいての解き放たれた Hudenc が主人公を探してついにモロワに潜むトリスタンの許に至るとい

155
(14) 動物の嗅覚の認識力が強調されたエピソード——〔I〕に引用——を思わせる。『オクスフ

オード狂恋』⁽⁴⁶⁾や『ベルヌ狂恋』⁽⁴⁷⁾の道化トリスタンを認識するユダンでもある。

[I][II]ともに獵犬の認識力(嗅覚)の人間のそれに対する優位が語られるばかりか、一方動物の情愛を語りここで固有名詞による主人公との連りの上に、先行のテキストの参照で——intertextualitéの視点から——強調されてくるのはさらにトリスタンとの分ち難い「チギリ」であり、かれの本源的なその犬狗との関係となろう。

【III】Hudentの子孫の役割

マルク王の家老ディナス(Dynas)はその恋人にポインター犬を二頭贈る。だが彼女はある騎士と駆け落ちをし、騎士との間で果たし合が行われ、ディナスが勝者となる。にもかかわらず、恋人は敗者を選ぶ。一方、ポインター犬は元の主人を選ぶ。

この挿話でトリスタンは登場しない。その愛犬ユダン「から生まれた二頭のポインター犬」(les braqués ... de Hudenc estoient estrait) (§ 125, l. 14-15)がマルク王の側近とその恋人の間のやり取りに関わり、この獵犬の「血統とその生まれの良さ」 (§ 135, l. 14-15)が強調されて、テキストの主人公の軌跡に添うエピソードとなっていることが注目される。ディナスはポインターを「心から可愛がる」 (§ 125, l. 14-16)「たいそう可愛がっていた」(...amoit a merveilles) (§ 131, l. 10-11)。ユダンの子に寄せるディナスの執心を、もしBの丁寧な読者であれば十分に納得する筈である。かれはトリスタンを「たいそう愛していた」(a merveille amoit Tristran) (v.1086)からその飼い犬にも同じ情をもつ。

Bにおいても『散文』や他所においても、かかる記載はトリスタンに関してはない。物語の主人公がユダンに執着するという箇所は欠く。

その代わりBは人と動物の愛情を一般論として取り上げて「ソロモン」——実際はかれの言葉ではない⁽⁴⁸⁾——の引用に及ぶ。

ソロモンがいみじくも言うように
友はおのれの獵犬、と。(vv.1461-1462)⁽⁴⁹⁾

(Salemon dit que droituriers
Que ses amis c'ert ses levriers,)

Bでの獵犬はポインターではなく、グレーハウンド(兎狩の脚の速い体高)との友情が人間との間に成立することが、ユダン導入部で格言的に言及されている。

獵犬は昔の主人をあくまで選び、恋人(女性)はディナスを捨てる。「犬狗^{サガ}の性は...女性のそれより勝れる」 (§ 136, l. 10-13)とすることで『散文』は[I][II]の認識の線上に位置しつつも、その視点は異なり、焦点があてられるのは新たなモラリスム(misogynie)の展開である。犬狗に比されるのは女性なのだ。

この部分の『散文』のソースは定め難い⁽⁵⁰⁾。としても、『剣の騎士』⁽⁵¹⁾(*Le chevalier à l'épée*)——12世紀末ないし13世紀初めの制作——ないし『ラギデルの復讐』⁽⁵²⁾(*La Vengeance Raguidel*)——12世紀末——はとくに興味深い。前者はこの主題の「最古の形」⁽⁵³⁾をとどめたもの、と看做しえる。いずれにしても、アルチュールの甥、ゴーヴェン(Gauvain)

を主人公としたサイクルに属する「最古の詩の一」⁽⁵⁴⁾に関連づけられる『剣の騎士』において「人間一般に勝る犬狗の能力」は「女性」に置き換わり、ゴーヴェンに寄せる情愛において犬狗が勝る、と結論づけられる (vv.1107-1108)。

この三テキストにおける重要な共通点は、字句レベルで選択が常に「道の真ん中」(『剣の騎士』、v.1054;『ラギデル』、v.4708)に位置することである。主人公とその恋人を両極として犬狗は同距離から選択対象に向かう。一方、『散文』では「道の真ん中」(\$137、1.11-12)にあり、二人のライヴァル(ディナスと「ある騎士」と等距離におかれるのは恋人である。彼女の運命は逆にこの二人から共に退けられ、犬狗は「かれら二人の間」(\$136、1.2)——ここでは「道」の介在はない——からディナスを慕って疾走する。

『散文』の作者はモチーフを共有しつつも、決して安易にその流れに乗ってはいない。『剣の騎士』グレーハウンド犬や、『ラギデル』の普通名詞「イヌ」を敢えてポインター犬とし、さらにテキスト本来の主人公トリスタンの愛犬ユダン縁りの関係をもたせる。

本エピソードに *misogynie* を摘発するのは容易である。一種の諦観の影に見えにくい新たなメッセージは犬狗と飼い主の間に成立する情愛、Bのようなテキストにも二冊の『狂恋』にも決して読まれなかった、人間側の動物への情愛が、友情論がディナスという脇役を通じて表明されていることが著しく目立つ。このアクセントの移動に注意がなされてよい。

[IV] トリスタンとイズーの死後の物語

「早くて1340年頃で遅くて1450年頃か」⁽⁵⁵⁾とされる、本筋が制作されて110年から220年を経て、いわば後日談が現われる。トリスタンとイズーの亡き後、亡骸はコーンウォールに運ばれる。イズーの侍女ブランジャン (Brangin) の兄弟ペレニス (Perenis) は人々の嘆き悲しむ声を聞き (p.394)、二人の恋人たちの訃報を耳にする。かれはかれらの墓のまえで愁嘆場を繰り広げ、その場を死に至ることでもなければ立ち去ることはなからう、と思われたので、王はそこにかれの家を建てさせる。

一方、ユダンは森に行き、多くの鹿を見るが、戻ってきて「最初に亡骸が安置された岸辺に行き、吠え始める」そして「その葬られた礼拝堂に」と向かう。ペレニスを認めるや、駆け寄り「主の亡骸がそこに葬られていることを跡から嗅ぎ出して」周囲を驚かす悲しみを示す。

「ユダンとペレニスはそこで食すことなく、飲むことなく留まった。」

(Illeuc demeurerent Heudent et Perenis sans boire et sans mangier) (p.394)

ペレニスはブランジャンとゴヴェルナル——この二人はトリスタンの故郷のレオノワの王国を渡されていた——に使者を送る。馳せ参じたかれらはユダンによって墓所の在りかを知る。二人はペレニスとユダンをともない帰国する。ユダンはペレニスという副次的人物をなぞり、トリスタンと長い主従関係で結ばれたゴヴェルナルの悲嘆を先取りする。

『散文』の結末とトリスタンの死はその特権的な獵犬により確認される⁽⁵⁶⁾。

るが、その際にトリスタンは狂人／道化、吟遊詩人、巡礼、ライ患者、修道士等に変装する。だが狩猟の人、狩猟犬とかかわり続ける主人公の姿はかれが担うこととなる「情熱恋愛の人」に先行し原始の「禁忌」の深いところにある影を曳する。

ときまさに Marco Polo 等の旅行記の隆盛がインド東南端部に人喰い人種の「犬頭の人」Cynocéphales を置き直し罪と悪徳を地理的に遠避けた⁽⁵⁷⁾。「トリスタン物語」の韻文より『散文』への書換え——二挿話にふり分けられた「モロワの森」、ユダンの子孫を介して新たな主題をとり込み、主人公の死とその後日談により——の持つ意味が、その心性史上に確認できるのはその時である⁽⁵⁸⁾。

—— 続 ——

NOTES

- (1) 同大学の小松英輔氏によるマイクロフィルム撮影と *Cours de Linguistique Générale* を意味する。この業績については稿者はさきにイタリアの専門誌 *Studi Francesi* に掲載した (tome, LXXXVIII (1986) p.190)。
- (2) 同大学の下宮忠雄氏を交えての読書会で「十数年前に」「読みかけたことがあった」と三宅氏の添え書きに読まれる。
- (3) “L'Émeraude d'Iseut et le jaspé de Tristan”, *Romania*, tome 111 (1993 pour 1990), pp.361-384.
- (4) “Le Feu et la Fuite: le *Tristan* de Béroul et les autres Romans de Trsitán”, in *Tristania*, volume XVI (1995), pp.77-100.
- (5) 制作年代1170年ごろ。本稿で依拠した版本は Béroul, *Le Roman de Tristan*, éd. par E. Muret, quatrième édition revue par L. M. Defourques, Paris, 1962.
- (6) Thomas, *Les Fragments du Roman de Tristan, poème du XIIe siècle*, éd. par B. H. Wind, Genève-Paris, 1960.
- (7) 年代推定は古いテキストにあっては絶えず大きな論争を引きおこしているが、本稿では論争の前後関係などはすべて省略して定説を採り、確定年代の得られぬ場合は相対年代、つまり『クリジェス』は Thomas のヴァージョンの直後というように指定するに留める。
- (8) *Les deux poèmes de La Folie Tristan*, éd. par F. Lecoy, Paris, 1994, p.6. v.761.
- (9) *Tristan*, herausgegeben v. K. Marold, Berlin-New York, 1977, p.220, vv.15800-15803.
- (10) Robert, *The Saga of Tristram and Isönd*, trad. par P. Schach, Lincoln-London, 1973, chapter 63.
- (11) J. Bédier, *Le Roman de Tristan par Thomas, poème du XIIe siècle*, tome II, Paris, 1902, pp.312-313.
- (12) Petit Creü が妖精の国 (アヴァロン) から来た、と Gottfried (éd. Marold, p.220, v.15802) には明言がある。それが Bédier の Thomas 再構成版に読まれる (上掲注(11)参照)。
- (13) たとえば D. Bernard, *L'Homme et le Loup*, (邦訳 (高橋正男), 『狼と人間』, 1991)
- (14) L. Gnädinger, *Huidan und petitcreü, Gestalt und Figur des Hundes in der mittelalterlichen Tristandichtung*, Zurich, 1971.
- (15) 聖書には30回程の言及があるが腐肉を漁るジャカルしか知らない (Job. 30, 1; Ps 22 (21), 17, 1; Rois 2I 19, 23-24; Ep. Philipp, 3, 2; Apoc. 22, 15, etc)
- (16) F. Jenkins, The Role of the Dog in Romano-Gaulish Religion, *Latomus*, t. XVI (1957), pp.60-76.
- (17) かれはまず自分の名に含まれる“犬狗”の要素——Cuchulain——の故に、イヌ肉を食することが禁じられ、それを食して死に至る (禁忌の破壊 geasa) (W. Stokes, Cuchulain's Death: Abridged from the Book of Leinster, in *Revue Celtique*, tome 3 (1877), pp.175-185); D'Arbois de Jubainville, *L'épopée celtique en Irlande*, Paris, 1971, p.336.
- (18) 馬の代わりに「犬を伴う者」トリスタンの在り様をもって物語のケルト起源を証明する、とする見解はすでに G. Paris により提出されていた (*Poèmes et légendes du moyen âge*, Paris, 1900, pp.121-142)
- (19) 佐藤輝夫, 『トリスタン伝説、流布本系の研究』, 中央公論社, 昭和56年, pp.63-81.
- (20) 「禁忌」、タブー (geasa) に関しては, J. R. Reinhard, *The Survival of Geis in Mediaeval Romance*, Halle, 1933, p.14.
- (21) 同掲書, pp.86-93. Cf. J. H. Lloyd, O. J. Bergin, G. Schoepperle, The Death of Diarmaid, in *Revue Celtique*, tome 33 (1912), pp.157-179 (特に pp.160-161) .
- (22) 佐藤輝夫, 前掲書, p.88.
- (23) ベルシャ起源の *Wis & Raminn* など。Cf. P. Gallais, *Genèse du roman occidental, Essais sur Tristan et Iseut et son modèle persan*, Paris, 1974.
- (24) *Les Romans de Chrétien de Troyes, Cligès*, éd. par A. Micha, Paris, 1957, p.84.
- (25) あらゆる野鳥の声を真似ることのできるトリスタンの特技などについてはアングロ=ノルマン方言で書かれた“Donnei des Amanz”, (G. Paris, in *Romania*, t. XXV (1896), p.508) 参照。

- (26) 狩猟場面が筋書の急展開を招来する例は数知れないが、そのような設定を『トリスタン物語』両系列ともに見い出せない。 Cf. *Les Lais de Marie de France*, publ. par J. Rychner, Paris, 1969 の「短詩」Guigemar (pp.5-32), Biscraveret (pp.61-71), Lanval (pp.72-92) など。
- (27) 鷹狩より半世紀して、犬を使う「狩猟」は十二世紀末、イギリスに伝わる (F. Rémigereau, *Tristan, maître de vénerie dans la tradition anglaise et dans le roman de Thomas*, in *Romania*, t. LVIII (1932), pp.218-237)。
- (28) Ph. Ménard in *La Chasse au Moyen Age, Actes du Colloque de Nice, 22/24 juin 1979*.
- (29) Guigemar, éd. cit. de Rychner, p.8, vv.81-86.
- (30) Chrétien de Troyes, *Erec et Enide*, publ. par M. Roques, Paris, 1973, p.4, vv.123-124; Guingamor, in *Les Lais Anonymes des XIIe et XIIIe siècles*, publ. par P. M. O'Hara Tobin, Genève, 1976, p.142, vv.204-205.
- (31) *Enéas*, éd. par J. J. Salverda de Grave, t. 1, Paris, 1964, p.145, vv.4752-4754.
- (32) Vergilius, *Aeneidos*, in *Opera*, recognovit R. A. B. Mynors, Oxonii, MCMLXIX, VIII, p.287, vv.166-168.
- (33) “distraction” (M. Bloch, *La Société féodale*, Paris, 1965, p.422; M. Pastoureau, *La vie quotidienne en France et en Angleterre au temps des chevaliers de la Table Ronde*, Paris, 1976, pp.136-138)。
- (34) 12世紀末はポインター種が全盛を迎え、一世紀後には毛の長い、耳の垂れた、小型ないし中型犬「スパニエル」に趣向が移る (J.-O. Benoist, *La Chasse au vol. Techniques de chasse et valeur symbolique de la volerie*, in *La Chasse* p.121)。
- (35) *Bestiaires du Moyen Age*, présentés par G. Bianciotto, Paris, 1980, p.225.
- (36) Bérout, éd. cit. de E. Muret- L. M. Defourques (上掲注(5)), p.49.
- (37) Eilhart ではトリスタンが何頭かのなかでも Utant を最も可愛がっていた。Eilhart von Oberg, *Tristrant*, éd. par D. Buschinger, Göppingen, 1976, pp.343-353. (vv.4370-4371) *Eilhart* の15世紀の散文訳は数あるトリスタンの猟犬の中でもウクタントをとくに可愛がったばかりかかれ自身で飼育した、とある (『トリストラントとイザルテ』、(小竹澄栄訳、国書刊行会、1988年、p.161))。
- (38) “dass er der erst wer, /der dass erdächte, / dass bracken brächte / zû recht wildess gefert.” (ibid., p.356). B の狩猟場面の詳細はドイツ語流布系で消える代わりにこうした hyperbole が挿入される (その散文訳では (前掲注(7)参照) では消える)。Eilhart において Utant が「代替」するのはトリスタンばかりかイザルテ (C.C.M., tome XIV (1971), p.380)。
- (39) foresta, forestis は「狩猟にあてられ」、silva と対立する。部分的に「樹木の領域」を指す (G. de Gislain, *L'Evolution du Droit de Garenne au Moyen Age*, in *La Chasse au Moyen Age, Actes du Colloque de Nice, 22 / 24 juin 1979*, Paris, 1980, p.39). foresta, forestis (狩猟空間) の開墾は「トリスタン物語」の各ヴァージョンの書かれた12世紀、その頂点に達していた (G. Duby, *L'Economie rurale et la vie des campagnes dans l'Occident médiéval*, Paris, 1962, p.146)。
- (40) “mot buen archier” (éd. cit. p.40)
- (41) “prist l'arc, par le bois vait, / Vit.... ancoche et trait” (ibid., p.40)
- (42) “Trova Tristan l'arc Qui ne faut” (ibid., p.54,v.1752)
- (43) “nos avriens le monde perdu, et li mondes nos” (éd. cit. de Curtis, t. II, p.149)
- (44) éd. de Ph. Ménard, t. I, p.272
- (45) Ibid., §188, l. 26-30.
- (46) *Les deux poèmes de La Folie Tristan*, éd. par F. Lecoy, Paris, 1994, p.80-82, v.895-938.
- (47) Ibid., p.31-32, V. 485-526.
- (48) 『ゲスタ・ロマノールム』(*Gesta Romanorum*) に記載された説話を B が知っていたと看做しえる (F. Lecoy, *Sur les vers 1461-1462 du Tristan de Bérout*, in *Romania*, tome LXXX (1959), pp.82-85)。
- (49) Bérout. éd. cit. de E. Muret- L. M. Defourques (上掲注(5)), p.45.
- (50) E. Baumgartner, *Le “Tristan en prose”, essai d'interprétation d'un roman médiéval*, Genève, 1975, p.141.
- (51) Baltimore, 1900, vv.861-1191.
- (52) Éd. par Friedwagner, Halle, 1909, vv.3362-3693 et 3747-4857.
- (53) Ph. Ménard, *Le Rire et le sourire dans le Roman Courtois en France au Moyen Age*, Genève, 1969, pp.231-234.
- (54) E. Baumgartner, *Le Chevaier à l'épée*. in *La Légende Arthurienne*, Paris, 1989, p.511. 研究史上で遅れているゴーヴェンのサイクルとこの主題との読み合わせは必要となろう。「女性と犬狗」の主題との読み合わせは Gnädinger になし、まして『散文』は全く除外されている (上掲注(14))。 Cf. K. Busby, *Gawain, in old French Literature*, Amsterdam, 1980, pp.248-257. B における星座の研究 (シリウス) などが (Ph. Walter, *Orion et Tristan ou la Sémantique des étoiles, Senefiance*, tome 13 (1983), pp.437-449) 唯一ではないか?
- (55) E. Baumgartner, *Op. cit.*, p.83.
- (56) このトリスタン死後の結びは非常に好まれた形跡がある。インクナブラにはこの部分が付されて刊行された (Ibid., p.82, note 25)。
- (57) Philippe Ménard (佐佐木茂美解説)、*L'illustration du “Devisement du Monde” de Marco Polo*, 『明星大学研究紀要』、第2号 (1994)、p.157, XXX, p.166-167 および拙解説、p.152, note 15 (古典典拠を含む)。
- (58) 重要な当時のジャンル「動物誌」は犬狗のネガとしてファブラ「肉を運んでいる犬」(『イソップ寓話』(山本光雄訳、岩波

文庫、p.145-146) を載せ (Cf. Op.cit., (本稿注(35)、p.66) この寓話をして「無知」と「非理性」を表象させた。「欲ふかき犬の話」は、16世紀に排除空間に向かって東漸し、わが国で19世紀、国定教科書に組み入れられる (小堀桂一郎、『イソップ寓話、その伝承と変容』、中公新書、p.261-263)。肯定的側面は13世紀ドミニコ会創設の因縁に読まれる。Domini'canis (Domini 神の、canis 犬)、イヌ (修道士) は「イエスの代弁者」として機能し悪徳のイメージから脱皮する。近年、『神の犬』 (*Les Chiens de Dieu*) はリトワニア語で「狼男」を指すという指摘で書き始めた G. Milin (Brest, 1993, p.7) は東方から「狼男」の侵入と同時期に「イヌ」に寄せられた意識上の変化に言及がないのは惜まれる。相矛盾する connotations がそれぞれ逆転・反転し始めた時点にわれわれの『散文トリスタン物語』があったはずなのだ。